

記録映画

『サルトル自身によるサルトル』

竹田正純

極度の視力減退によって、サルトルが厖大な「フローベール論」の第4巻をついに断念したニュースはまだ記憶に新しい。読み書きにいちじるしく困難を感じていたサルトルが、映像を表現メディアにえらんで、自らの半生を語ろうとしたのがこの映画である。かつてサルトルは、自伝として『言葉』を書いたが、この『サルトル自身によるサルトル』も、メディアこそ異にすれ、やはり彼の自伝のなかに加えられるべきものだと思う。

1972年の2月から3月にかけて、サルトルは、ごく親しい友人たちに囲まれてカメラの前に立った。この友人たちとの対話をとおして彼は「わが人生」を語っていく。囲むのは、シモーヌ・ド・ボーヴォワールをはじめ、「現代誌」編集委員のアンドレ・ゴルツ、サルトルの教え子でジャーナリストのジャック＝ローラン・ボスト、人類学者のジャン・プイヨンという、いわば《サルトル・ファミリー》の面々。日本のサルトリアンにもお馴染みの顔ぶれである。ときどきカメラのうしろから二人の監督、アレクサンドル・アストリュク（ヌーヴェル・ヴァーグの先駆者）とミシェル・コンタ（サルトル研究家）が質問に加わる。こうした寛いだ雰囲気のなかでサルトルは語る。

映画はI部とII部にわかれ、I部ではサルトルの精神形成のおこなわれた時期から文学的思想的成熟のほぼ完成する時期まで、つまり、祖父の家で過ごした幼・少年期からはじまって、エコール・ノルマルを中心とする青春時代、『呕吐』発表、二次大戦勃発、動員、捕虜生活、『存在と無』執筆、ナチ占領下での『蝇』初演までを語る。この時期までに、後年のサルトル思想の主軸と

記録映画『サルトル自身によるサルトル』

るべきモチーフのほとんどがあらわれるわけで、偶然性、自由、暴力——「暴力を内面化した」とラ・ロシェル時代を語るのははじめてである——などの問題が順次論じられていく。Ⅱ部では、Ⅰ部で語られた彼の思想形成の結果が、激変する戦後史のなかでどう験されていくかが検討される、といった形で対話はすすむ。

サルトルが語る言葉の背景には 20 世紀のさまざまな事件のニュース・フィルムが挿入され、さながら今世紀の歴史ドキュメントを見る思いがするが、彼が戦後いちはやく提唱した「参加」の問題を考えるとき、戦後 30 年の歴史は、そのままサルトルの《参加の歴史》なのだ、ということができる。彼は、インドシナ戦争、朝鮮戦争、ブダペスト事件、アルジェリア戦争、ド・ゴール再登場などのフィルムが流れるなか「参加の文学」にふれて「純粹に文学的著作などないと考えていた」「すべての著作は政治的なのだから」と語り、「参加」が単なる《政治化》ではないことを強調する。「参加とは作品をとおしての状況への異議申し立て、ないしはその受容なのだ」という部分は、さまざまの誤解をまねいた《アンガージュマン》理論を適確にいいかえた言葉だと思う。

以後いくつかの曲折を経て 1968 年の「五月革命」、左翼急進グループ「毛沢東派」^{マオイ}との協力へとサルトルの足どりはすすんでいくが、これらのフィルムが挿入されるとき「大衆行動は政治的意味をもつと同時に、つねに道徳的意味をもっている」とごく最近の考え方を語っている。これが「五月」以後の変化で、もっとも新しいサルトルである。

戦前、サルトルに《道徳的》な一時期のあったことはボーヴォワールがその「回想記」で語ったところで、それはほぼ『存在と無』の時期にあたる。末尾で新たに「倫理学」を書くことを読者に約束していたが、やがて《道徳主義》は《現実主義》に変わり、「倫理学」の書は放棄されてしまった。しかし「五月」はふたたび彼を《道徳主義》に連れもどす。いわば出発点に戻ったことになる。「道徳を政治のなかにある何ものかである、と新たに提起し闘う仲間を発見したのだ」という。「仲間」とは、「五月」の運動のなかから生まれた《毛沢東派》のことであるが、彼らの、道徳を上部構造としてではなく下部構造として考え、労働のなかに世界観（道徳）がふくまれている、とする思想にサルト

記録映画『サルトル自身によるサルトル』

ルは深い共感をおぼえる。大作家のスキャンダラスな事件として伝えられた、過激派グループとの協力の眞の意味が明らかにされる。

また 68 年について、「《五月》以来、何か非常に特別なことが起こった。《五月》の事件をおこした学生運動は街頭に出て、いくつかの事柄に異議を申し立てた。とくに演説式の講義や、教師たちの知識、すなわち権力や、文化にたいする国家の介入や、文化が幾人かの者だけに取りのけられ、特殊なものになっている事実に異議を申し立てた。文化は普遍的であるべきであり、つまり万人のほうにむかうべきであったのに。そして、これらすべてをとおして彼らが批判していたのは、とくに古典的知識人であったことがわかった」と語る。

サルトルは「五月」が自らにむけられた異議申し立てであったと考える。自らを《古典的知識人》と規定しつつ、知識人の「大衆と共にある新たな存在形式」、いいかえれば新たな知識人像の模索を開始する。知識人の《特殊的権力》を否定して、その場合、何が彼を知識人たらしめるか、と自問する。知識人は状況によって要請されるときのみ大衆のために彼のもつ普遍性を役立てることができる。「これは知識人がいわゆる《定着》すること、すなわち工場に入り、一労働者となるために学問を放棄することを予想させる……私のケースとは、大ざっぱにいえば、むしろ古典的知識人でありつつ、知識人はどうなっていくか、どうなりつつあるかを見ていくことになる」と語る。

この映画が撮影されたころ、サルトルは半失明の状態に悩まされつつまだ「フローベール論」を書きつづけていた。冒頭に出てくる『司法と国家』の講演フィルムで、彼は、なぜ自分は「フローベール論」——ブルジョアの言語で、ブルジョアの読者のために書くことだと彼はいう——を、労働者との連帯を感じながらも書くことを中止しないかを自らに問いつつ、この作家論への矛盾した執着と否定の気持を語っている。これは「フローベール論」に固執する自己——古典的知識人——とそれを超えて新たな知識人論を模索する自己との矛盾についての正直な告白であろう。

資金難のために、映画の完成は結局 1976 年になった。その間サルトルの視力減退はすすみ、「フローベール論」の第 4 卷はついに放棄され、現在、若い友人ピエール・ヴィクトールとの共著で『権力と自由』が準備されている旨の

解説が加えられる。

映画は、全体として、68年「五月」が濃い影を落としている《自伝》という印象が強い。その意味では、1972年におけるサルトルの到達点を示す里程碑としての性格の濃い映画である。変貌につぐ変貌をなしてきたこの作家を思うと、やはりそうみるのが正当であろう。また映画の後半で、新たな知識人像を模索するサルトルが現われるが、この《自伝》は、1905年生まれの一知識人の歴史であるとともに、新たな《知識人論》の提起でもある、ということができるよう。

[付記]——映画は1977年の秋から冬にかけて東京と京都で上映された。近々再上映される噂も耳にする。映画台本がガリマール社から併せて出版され、邦訳（人文書院）もある。邦訳を参照させてもらったことをお断りするが、2, 3単純なミスに気づいた。その一つ、重要な個所なので記しておく。106ページ「戦前に一時期、道徳化したことがあった。ある種の道徳の瞞着をひきずってね。けれども道徳そのものの瞞着じゃない」は、*démystification*を逆の意味に訳してあるが、「……ある種の道徳の迷妄を打破した。けれども道徳そのものの迷妄打破というのではない」となるべきだろう。